

榎本植民地がメキシコに遺した足跡

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学情報コミュニケーション学研究所 公開日: 2021-05-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 丹波, 美佐子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/21682

榎本植民地がメキシコに遺した足跡

丹波 美佐子*

Trace of Enomoto Colony Left in Mexico

by Misako TAMBA

榎本武揚は、国力のない日本が海外へ進出するのは武力ではなく他国の土地を平和裏に買い求め、そこへ日本人を送り、土地を開拓し、日本と貿易し、移民は「出稼ぎ移民」ではなく「定住移民」の思想を描いていた。当時のメキシコでは、ポルフィリオ・ディアスの下「メキシコ移民条例」が交付され、永住移民が条件とされていた。こうして移民計画は実行されたのである。ラテンアメリカ初の試みであった。

明治 30 年(1897)5 月 19 日に「榎本植民団員」35 名がメキシコ、チアパス州のアカコヤグア村に入植した。主にコーヒー栽培を目的としていた。しかし、3 年たらずで榎本植民地は崩壊の道をたどる。本稿は、この地で苦労を重ねた結果、逃亡した者、日墨協働会社を設立した者、成功の道を歩んだ者たちの挫折と夢を追求する。またこの地がその後はどう変貌していくのかについても触れる。

Takeaki Enomoto held a vision where Japan, which did not have national power at that time, should expand its business abroad not by utilizing military power but by peacefully buying land in foreign countries and sending Japanese people there, having them cultivate the land and trade with Japan: He thought that Japanese people should settle down in the place rather than just emigrating there.

Around the same time in Mexico, Porfirio Díaz issued an ordinance on immigrants with the condition that immigrants must live there permanently. In this way, Enomoto's immigration and colonization plan was carried out, which was the first attempt to establish such a colony in Latin America.

On May 19 th, 1897 (the 30th year of the Meiji Period), 35 members of the Enomoto colony settled in Acacoyagua village; in the state of Chiapas in Mexico mainly in order to conduct coffee cultivation. However, in less than three years, the Enomoto colony collapsed.

This paper will trace the history of the colonists who experienced periods of difficulties and then fled from the area; and the ones who built the Japanese-Mexican Cooperative Associations. Furthermore, it will discuss the frustrations and dreams of those who sought to succeed in the colony, and describe how they transformed the area.

キーワード：榎本植民地、メキシコ

Key words: Enomoto Colony, Mexico

1. はじめに

1897 年(明治 30 年)5 月、南メキシコ、チアパス州、エスクイントラ町近傍、アカコヤグア村に 35 名の日本人移住者の一団が「榎本植民地」

の名をもってその地へ赴いた。ラテンアメリカ移民史初の試みであった。本稿では、榎本武揚とメキシコ政府の間にもどのような条約が結ばれたか、榎本植民地とはどのような地形だったのか、なぜ榎本武揚は植民団をメキシコに入植させたのか、報われることなくメキシコに夢を抱いて渡った者

* 明治大学情報コミュニケーション学部 兼任講師

本研究ノートは、情報コミュニケーション学部紀要編集委員会により指名された複数の匿名レフェリーの査読を経たものである。This paper was duly reviewed and accepted by the anonymous referees who were appointed by the bulletin editorial committee of the School of Information and Communication.

たちはどんな痕跡を遺したのかを考察する。ここに挙げた数々の疑問を、多くの文献、報告書、論文、調査等を参考に紐解いていくこととする。

また、著者が2017年2月にチアパス州タパチュラ自治大学で講演を行った際に訪ねてきてくれた日本人移住者末裔の方たちとの面談もここに述べる。更に、著者がメキシコ市に滞在していたころに知り合った「松田英二」（内村鑑三門下の一人で植物学者）についてはあまり日本では知られていないが、松田氏がチアパスで経営した「希望農場」や植物学者としてメキシコ国にもたらした偉業も紹介したい。

ある日、著者の手元に一冊の本が届いた。それはメキシコ人である Víctor Manuel Camoseco 氏が書いた *Correo de Hiroshima* 『広島からの便り』と言う小説である。その本の登場人物がチアパス州タパチュラ市出身だった。もしかして榎本植民地と関係あるのではないかと考え、Camoseco 氏と連絡を取った。これがきっかけでタパチュラ大学での講演会に招かれることとなったのである。いつかメキシコ榎本植民地について自分の経験も踏まえて書きたいと思い、未熟ではあるがこの研究ノートを投稿することに至った。

2. 榎本植民購入契約までの道のり

榎本武揚が考えた「植民移住」の概念は、平和的に土地問題を解決して、未開発の土地を日本が国として購入し、そこに日本人を送って経済的に独立させ、資源の開発を行い、本国日本との貿易

を行おうとするのが骨子で、この領土確保とは武力によって侵略し土地を占領する植民地ではなかった。「植民移住」についての基本的構想は、単なる個人的な資格で行われる契約移民ではなく、まず国家がその目的のために植民土地を確保し、植民移住（永住移民）を行い、その植民事業を通じて本国と貿易を行うことにあった。そのためには膨大な経費を必要とするため国家事業のひとつとして行う必要があった¹。榎本の考える移民計画は出稼ぎ移民ではなく、移住地を耕しそこで日本民族の子孫を育て、日本人の海外発展の拠点とする移住であった²。この理念を実行に移すため榎本外務大臣は1891年に外務省に「移民課」を設置し、定住移民の送り出し先としての候補地を模索していた。

こうしたときに、在サンフランシスコ総領事館の藤田敏郎書記生の報告書が届いた。その内容とはメキシコ政府が国内開発のため国策として外国投資と移民を大いに歓迎しているとのこと、メキシコが日本人植民にとって将来有望な土地であることを榎本に建議したのである。

それを受けてメキシコ植民の可能性を調査するよう在米特命全権公使の建野郷三に命じた。建野は直接メキシコへ赴き調査した結果、藤田と同じような内容の報告が送られてきた。そこで、榎本は1891年に中南米で最初の日本領事館をメキシコに開設したのである。

当時のメキシコ大統領は Porfirio Díaz ポルフィリオ・ディアス³、農商務植民大臣は Manuel Fernández マヌエル・フェルナンデス⁴であった。

1 真継真編『日本・メキシコ交流史話』（万年青書房、1993年）（p.238, 244）

2 上野久著『メキシコ榎本植民：榎本武揚の理想と現実』（中公文庫、1994年）（p.24）

3 ディアスは35年間に渡り独裁体制をしき、長期安定政権を達成した。外国資本の導入と特定の民族資本家の優遇政策をとり、目ざましい経済成長を成し遂げたが、この急激な経済成長と近代化は貧富の格差と不正を生み、やがて全国各地で土地を求める農民運動が活発化し1910年にメキシコ革命が勃発した。榎本植民地はその動乱に巻き込まれたのである。

4 フェルナンデスは、1874年12月9日金星が太陽面を通過するという現象を観測するために金星観測隊の一員として日本に派遣されていた。後に農商務植民大臣として日墨修好通商条約の締結や日本人のメキシコ植民に影響を發揮する人物である。

ディアスは35年間に渡る独裁体制の下、外国資本の導入と特定の民族資本家の優遇政策をとり、目ざましい経済成長を成し遂げていた。ディアスは未開発地をもって基本農業の興隆を国策とし、外国の投資、移民の招致を歓迎する政策をとっていた。移民を求めるメキシコと移民を送ろうとする日本は結ばれ、植民計画は実現の道をたどったのである。

榎本は1892年に外務大臣の職を離れ「植民協会」を組織した。設立目的は次のように記されている⁵。

1. 増加する国内人口を海外に移民させ、国内の人口問題の解決策とする。
2. 海外で日本人種を繁殖させ、移民という平和的手段により日本領土の拡大を計る。
3. 海外移民と日本との交易を促進し、平和時の海権を制する。
4. 封建的、鎖國的日本人の精神風土を打破し、新知識を輸入し日本人の人心を一新する。

一方、メキシコ南部にあるチアパス州の調査にあたった根本氏⁶は(橋口氏も同行⁷)チアパスでコーヒーを栽培すればその収益は莫大なものとなるだろうと報告書を提出した。海外において日本人による一大植民地を建設するには多額の資本と時間を必要とするため、少額の資本でパイオニア移民を送り込み、その成功を待って資本を増やし、後続移民を増やす提案がだされた。

グアテマラ国境に位置するこの地では、当時のコーヒー生産地としての良好な土地の約半分はドイツ人によるもので、コーヒー栽培に適した土地はほとんどヨーロッパ移民が占めていた。イタリア、フランス、イギリス、アメリカ諸国も競ってこの地域の適耕地に利権獲得運動を開始していた。当時の駐日メキシコ公使ウオルハイムは早急の契約を示唆し日本側当局の決意を促した。

当時の在メキシコ総領事室田義文は榎本子爵の代理人の委任を受け、メキシコ政府との交渉の結果、1897年1月29日、メキシコ市においてエスクイントラ官有地払い下げ契約をフェルナンデス大臣ととりかわした。エスクイントラの土地6万5千ヘクタールを1ヘクタール(1万平方メートル)あたりメキシコペソ通貨の55センターヴォス、15年払いで購入する契約が調印された⁸。

しかし、「かくて多大の希望から生まれ出た榎本植民地⁹は、もろくも3年の寿命で消え果てたのである¹⁰」。

3. 榎本植民団の入植と崩壊

1897年3月24日午後4時、夢と希望を抱いた若者36名、通称「榎本植民団」は、アメリカ国籍¹¹「ゲーリック号」で地球の反対側、1万3千キロ彼方のメキシコへ向かったのである。しかし、チアパス州南端タパチュラ市より25キロのプエ

5 上野久、前掲書(p.29)

6 根本正(直民教会評議員をつとめる代議士)はチアパス州調査のためメキシコへ赴き「墨国探検紀行」と題する報告書をまとめた。その中で、チアパス州の土地を絶賛し、コーヒー栽培の見通しをバラ色に描いた。しかし、この内容については、根本が汽車の中で書いたもの、あるいは外国人の報告書を翻訳したものと、入植者に批判された。[上野p.30]

7 橋口文蔵は札幌農学校校長などを務めた農学者である。長く北海道の開拓に従事し、後年台湾総督府の殖産部長や台北県知事を歴任した人物である。

8 メキシコ国チャパス修通称榎本植民地誌同70周年記念公園建設報告

9 古い文献では植民地と表記

10 松田英二『南メキシコに遺された日本人の足跡』(玉川大学出版部、1966年)

11 上野の記述は「アメリカ国籍ゲーリック号」。大蔵敏之(1958年メキシコ領事)の報告書では「イギリス船ゲーリック号」と記述。船には米国出稼ぎ人も含めて84人乗船。

ルト・サン・ベニト港（現在プエルト・マデロ）に到着した時には35名になっていた。ゲーリック号がアメリカを出てメキシコのアカプルコに入港した時は、全員暑さに加え、長旅の疲労と船酔いのため病気になる者が多かった。山田新太郎氏は植民地を踏むことなく船中で死亡した。横浜港を深く出航した植民団員は以下のとおりである。

監督 愛知県出身 草鹿砥 寅二

(クサカド トラジ)

自由移民 計6名：

岩手県出身 照井 亮二郎

(テルイ リョウジロウ)

菅原 幸徳(スガワラ コウトク)

宮城県出身 高橋 熊太郎

(タカハシ クマタロウ)

太田 連二(オオタ レンジ)

清野 三郎(キヨノ サブロウ)

愛知県出身 松村 石松(マツムラ イシマツ)

契約移民 計29名：

愛知県出身 有馬 録太郎

(アリマ ロクタロウ)

鈴木 平太郎

(スズキ ヘイタロウ)

松本 栄吉(マツモト エイキチ)

黒柳 緑蔵

(クロヤギ リョクゾウ)

山本 仙吉(ヤマモト センキチ)

米沢 平二郎

(ヨネザワ ヒョウジロウ)

三井 久吉(ミツイ ヒサキチ)

山口 徳太郎

(ヤマグチ トクタロウ)

山本 金助

(ヤマモト キンスケ)

山田 新太郎

(ヤマダ シンタロウ)

杉浦 竹松(スギウラ タケマツ)

鈴木 応仁(スズキ オオジ)

鈴木 若(スズキ ワカ)

中村 善平(ナカムラ ゼンペイ)

山本 浅次郎

(ヤマモト アサジロウ)

渡辺 八平(ワタナベ ハッペイ)

野沢 為三郎

(ノザワ タメサブロウ)

白井 要作(シライ ヨウサク)

岡田 六蔵(オカダ ロクゾウ)

山口 信吉(ヤマグチ ノブヨシ)

松浦 仁作(マツウラ ジンサク)

兵庫県出身 金山 喜蔵(カナヤマ キゾウ)

小林 宇之吉

(コバヤシ ウノキチ)

東 与一(アズマ ヨイチ)

坂本 和太郎

(サカモト カズタロウ)

橋本 鶴二(ハンモト ツルジ)

清水 末吉(シミズ スエキチ)

大畑 菊松(オオバタ キクマツ)

山本 栄吉

(ヤマモト エイキチ)¹²

現在も多くの日系人(3世・4世)がこの地で活躍しているので名前を全て記入することとした。榎本植民団員の子孫が多数日本に住んでいる

12 植民団員の氏名は上野(1994)の記述と、大倉領事の報告書(1969)と若干異なっている。大蔵領事の報告書はローマ字でも氏名が記入されていることからこちらを参考。

との情報もある。

自由移民とは、植民地建設のための独立した移民（榎本が購入した植民地の一部を自己資金で購入し耕作し、利益は全額自分の物になる）。契約移民は出稼ぎ移民（日墨拓殖会社に雇用され、毎月会社から給料を受け取る労働者）である¹³。

榎本植民団員が到着した5月末は、この地は雨期だった。このメキシコ一帯の農業は、乾期の12月から翌年の1月・2月までに森林を切り開いて乾燥させ、4月ごろ雨期に入る直前火を放って焼き払い、雨の降るのを待って播種をするのである。しかし、5月末に着いたのでは用意すべき手順をこなしていなかったため畑もないし、困ったことにコーヒーの栽培法を誰も知らなかっただけでなくコーヒーの樹を見たことがないありさまだった。植民地を建設するには主目的のコーヒー苗を植えなければならなかったが、現地ではすでに植え付けは終了しており、苗がなかった。やっと草鹿砥がタパチュラからコーヒー苗を取り寄せたがエスクイントラの標高が低いため役に立たなかった。

豪雨と残暑のなか、生水でお腹を壊し、蚊に刺されマラリア病に苦しみ、原野の中には毒蛇と毒蜘蛛が生息し、慣れないハンモック生活が続いた。さらに、送られてくるはずのお金は届かず、持参した資金は底をつき、やっと耕した土地に芽吹いた芽は付近から侵入する豚や牛に食い尽くされてしまった。言葉も分からず村人との掛け合いも上手くできず、悲劇の植民地と化したのである。

ついに逃亡者が出た。18人の若者がメキシコ市まで1200キロの道を23日間歩いて日本大使館に現れたのである。ボロ服をまとい、疲れ果てた顔の青年を見たときは、室田公使も驚いたという。

公使は榎本に通報するが榎本からは「逃亡人は契約を履行しないとみなし、植民地に送還せずに各自勝手に適当な職に就くべし」との返事が返ってきた。しかし、室田公使自身がメキシコ政府と掛け合って植民地の払い下げを契約したからには、この事態を単なる逃亡事件と処理するわけにはいかなかった。結局、1か月メキシコ市の宿に留め、説得した上で再びチアパスに送還することとしたのである。

こんな騒ぎの間に、日本では植民協会の同人達が、榎本植民地から手を引いたのである。榎本子爵もまた政治上やその他の原因も伴い、植民事業から完全に手を引くことを決意した。

草鹿砥農学士は、コーヒー種子購入を目的としてグアテマラに赴いたが、グアテマラでは日本人入国を禁止する法令が発布された¹⁴後であったため目的を達することなく乗船帰国してしまった。植民地は指導者を失い、解体への一步を踏み出していたのである。草鹿砥氏は自身の責任の重大性を覚り、ついに自殺したと伝えられている。

多大の希望と期待に生まれた榎本植民地は、もろくも3年の寿命で1900年の半ばには解体してしまった。

失敗の原因としてあげられるのは、（1）事前調査の不足（2）入植時期の誤り（3）資金の不足（恐らくこれが最大の原因であると考えられる）（4）契約移民の質等がある。草鹿砥監督は契約移民に給料も払えず、中途半端な日本への帰国も資金調達が目的であった。この植民計画は当初から資金不足で発車したのである。榎本を取り巻く者たちが目先の利益に目がくらみことを急ぎすぎ、資金を早く回収し利益を得ようと焦ったのである¹⁵。

13 上野久、前掲書 p.50

14 上野久、前掲書 p.60「中国人・日本人はグアテマラの法律により入国が禁止されているゆえ即刻退去すべし」と命令された。

15 上野久、前掲書 p.62

議制とした。

4. その後の植民地

榎本植民地が解散すると、植民地の再建に青春をかけた自由移民の若者は小さなコーヒー園を開いたりして、ずいぶん苦しい努力を続けた。後にタフコ農場を拓いてサトウキビなども植えた。その後契約移民も加わり、タフコ農場に集まり奥州者と三河者との「三奥組合」を結成し共同事業を行うことを約束した。照井亮次郎、高橋熊太郎、清野三郎、契約移民の有馬六太郎、鈴木若、山本浅次郎の計6人である。彼らは少々の利益を得るようになったが、生活が苦しくなると、方々の農場や商店に稼ぎに出て組合に貢献した。

非常に興味深いのは、組織の社会的理念である。理事長として選ばれた照井は強烈な指導の下に組合を結束した。この組合は社会主義的な性格の強い規則のもとに運営されていた。規則では組合員の不動産、資本金はもちろんのこと、知力、労働力、経済力を組合財産とし、給料を払わない代わりに組合員が衣食住に要する費用をすべて負担すると定めている。組合の分配金は組合員に支払われることなく、帳簿上は組合の財産として記録された。組合設立からわずか5年で資本金は4倍に増えた。

無給料を原則に労働を提供することに対して不満がなかったわけではないが、共同組織として最も要請されたのが「協調」であった。照井は、文書あるいは口頭で社会主義的性格の組織を説き、協調精神の必要性を繰り返した。こうした照井の独断を避けるため、そして組合員の結束を維持するために、運営は民主的であった。新組合の加入、事業の拡大、決算、利益の分配などのすべてを合

4.1 日墨協働会社

1905年に三奥組合はメキシコ商法に従い名称を「日墨協働会社 *Compañía Japonesa-Mexicana Sociedad Cooperativa*」と定めたが、社会主義的性格の規則は変えなかった。社員は、日本とメキシコの二つを祖国として生きる決意をもち、日本とメキシコの間紛争があった場合は平和的解決、普遍中立を守ることを義務としていた。

会社設立1年後には資本金を2倍以上に増やし、5年後には資本金総額を9万ドル以上に増やすことを目標としていた。1912年頃はその全盛期であった。エスクイントラに本部、本店、薬種店、タパチュラ市に雑貨店、薬種店、染め物工場、他に三つの農場を経営し、毎月の利益はかなり膨らんでいたと言われている。照井自身の言葉によれば「社会主義的の協同団体」をつくりたかった。しかし、それには彼の会社構成員があまりに雑多な分子であったようだ。当時の社会学者吉野作造は、この規約を評して、どうやら50年進み過ぎていると嘆声を洩らしたと松田は記している¹⁶。

営利事業を発展していくことを目的としていた会社ではあるが、「教育積立金」を実施し、日本人社員とメキシコ人婦人との間に生まれた2世児童に対し教育を行うことを会社の重要な任務と照井は考えた。1906年にはアカコヤグア村の川沿いに「アウロラ（暁）小学校」を建設して寺小屋式教育を開始した。植民地における日本人の発展を100年後に期し、メキシコに育つ日本人2世が日墨両国の文化を学び、両国の架け橋となる理想を後生に託したのである。アウロラ小学校では、

16 松田英二、前掲書 p.12

日本から教師を招き、教科書は日本式ローマ字を用いることにした。

植民団員が実感した大きな壁は言葉である。異文化の中で先住民との交渉は進まず、誤解も解けず、言葉の不自由さで憤りの日々を過ごしたことは想像できる。それがゆえに、この会社は日本初の「西日辞典」¹⁷作成に情熱を注いだ。そしてついに日本初の辞典を世に出したのである。この辞典はわずか2000部だけ発行されたので現在残っている部数はきわめて少ない。

著者は中央大学多摩キャンパス図書館の地下でこの辞典を手にする事ができた。邦訳はすべてローマ字のルビがつけられていた。植民地で生まれた2世、3世への配慮であったと思われるがそれだけではない。この辞典は3万語を収録していて、漢字を知らないすべてのスペイン語話者にとって、ローマ字のルビは読みやすいのである。胸をときめかせながらこの古い辞典を手にした。照井を始めとする日墨協働会社が遺した汗と涙の遺産に感銘を受け、涙がとまらなかったのを覚えている。

しかし、この辞典が世に出た時は、日墨協働会社は解散していた。1910年にメキシコ革命が勃発し、革命内乱とともに外国人の所有物は略奪され殺人が乱発した。会社は痛々しい打撃をうけたのである。照井理事はこれにも屈せず、1917年日本に渡り、資本を得るために東京神田青年会館などで演説会を開いたが、彼が求める資本はついに集まらなかった。当時海外における最大の規模を誇った日墨協働会社は、1922年について解散を余儀なくされたのである。

照井はチアパス州を去っていった。照井は晩年、

ベラクルス州にある当時2000人くらいの寒村で、1930年10月4日、誰にも看取られることなく静かに世を去ったのである。56歳であった。

4.2 榎本植民地の後継、藤野植民地

メキシコへ植民団を送り込んだ榎本は、1900年には完全に計画から手を引いた。植民計画を放棄したが、メキシコ政府との官有地払い下げ契約の支払い義務は果たさなければならなかった。そこでこれを引き継いだのが当時滋賀県代議士の藤野辰次郎である。藤野は榎本から植民地にかかわる権利と義務を引き受け、メキシコ政府に対する年賦の支払いを継続することにした。「榎本植民地」は「藤野植民地」と名を変え、植民地には布施常松が送られ藤野植民地の開拓がはじまった。1912年榎本とメキシコ政府との官有地払い下げ契約第33条規定に従い、植民地の年賦払いが終了した。その結果、榎本と藤野が支払った年賦相当の土地として、6万4千町歩のうち、1万3526町歩が藤野の手に残った。他方、榎本が年賦を滞納した時期に、当時のカステイヨ農商務次官とウォルハイム駐日公使が4万4千6百12町歩立で替えたことから所有は二人のものとなった。藤野植民地は小さく収まった。

布施は内村鑑三の弟子であり、無教会キリスト教を信仰していた。内村の契めと藤野の懇願からキリスト教的精神に基づく理想郷建設をメキシコに実践することを決意した。布施は植民地の土地を開墾し、「ハラッパ農場」を開いた。ここで有畜多角農業という牧畜を主体にして、カカオ、稲、野菜などを栽培した。また、南メキシコに初めてのホルスタイン種の牛を入れた。広大な農場に

17 「西日辞典」日墨協働会社編集、東京右文社出版部、1925年。

は3, 4百頭の牛が放牧されていた。当時では珍しかったドイツ製の水力発電機やオランダ製の電話機を架設した。ここを頼って次第にメキシコに渡ってくる邦人が増えたのである。

1911年、布施が一時帰国した折の講演会を聞いて、農大実科の後輩、竹村四郎がメキシコに渡ってきた。竹村は「チサップ農場」と言う名の牧場を開いた。その後布施の助手を務めた内村鑑三門下生でもあった高田政助が布施を頼りにチアパス州に渡った。高田も「エスペランサ希望農場」を開いた。しかし、榎本の理想を引き継いだ藤野が他界してしまったので、藤野の養子2代目藤野辰次郎の手にゆだねられた。藤野2代目は先代の建設理想を受け継がなかったため、布施たちは植民地経営から身を引いた。その際、布施らが開墾した土地は名義とともにそれぞれに分け与えられた。

4.3 エスペランサ（希望）農場

布施常松の助手、高田政助が開拓したエスペランサ農場は、高田は長男で一人息子であったため、1918年に日本へやむなく引揚げを余儀なくされ、その後買い取ったのは内村門下の池田副詞、清水繁三郎、松田英二の3人であった。池田はついに移住を果たさず、清水は熱心に農場経営にあたったが、エスペランサ農場入植後、志半ばでマラリアに倒れ他界した。そこでエスペランサ農場は松田英二個人経営となった。メキシコ革命のさなか、農場に質素な部屋を構え、「教会を持たないキリスト教の教え」を地元の人間に伝えた。また松田は近郊の植物の研究の結果、新種を発見し、学会などに発表した。

5 松田英二

松田英二はエスペランサ農場の経営に携わっただけではなく、植物学者としてメキシコ国に多大な貢献をしたのである。2017年2月に、著者がメキシコ国立自治大学の植物研究所を訪れた際、大学内にあるサボテン植物園の創立者の一人である松田英二博士の写真が大きな額に収められ、入り口に飾られてあった。この研究所では松田博士は有名な教授であり、誰からも尊敬されていた。松田教授の教え子達が現在は研究所で活躍している。また、この訪問時に、たまたま知り合いの女性研究員に出会い、彼女が松田教授の書かれた数々の論文のうちの一冊を手渡してくれた。メキシコ中央盆地に生息する37種類の唇状花冠（シソ科）の標本も添えた研究である。立派な研究成果であるのは間違いなかった。松田氏はメキシコ国立自治大学が誇る研究員の一人であった。

松田英二の経歴をたどってみよう¹⁸。1894年に長崎に生まれる。島原中学校卒業後台湾に渡り、台北大学理農学植物学特別教室で植物分類学を学ぶ。その間、台北の山間僻地に足を延ばして植物採取をする一方、当時の日本軍の依頼を受けて台湾の楠の群生研究を行い、その謝金で1922年、メキシコに渡ったのである。

松田が受け継いだエスペランサ（希望）農場は、標高2,200メートルの岩山オバンド山の麓に位置し、これより20キロ西へ進めば太平洋に至る。1年中蒼々とした熱帯植物が絶えることなく無数の昆虫が飛び交うところである。松田は農業に従事しつつ植物学研究を精力的に行った。チアパス州のみならず、グアテマラ、ホンデュラスまで足を延ばした。その結果、植物学上処女地に等しい

18 上野久、前掲書 p115～120

南メキシコの植物分類が行われたのである¹⁹。松田のチアパス州での学者としての活動を彼の自筆から垣間見える。

「・・・農場の実益も確実に became したので、年来の悲願であった南メキシコの生物学誌を編まんとしてまず 1936 年から周囲の植物調査を始め、3 年後、アメリカの学会に触文を飛ばして動物学者、人類学者に呼びかけた。主旨は往復の旅費だけ持って来い、滞在費、メキシコ内旅行費、採集比費、助手、人夫等一切は希望農場の負担である」呼び掛けに応じ、ミシガン大学、イリノイ大学、フィラデルフィア大学、ニューヨーク博物館、などからやってきた。少なくとも 3 か月、長くて 6 か月、命がけて採集し、標本を各自の研究室に持ち帰り、それを研究分類して、また開けて乾燥期には希望農場に集まった。・・・皆は非常に喜び勇んで、立派な生物学誌を作り上げたいと力んだ。これを 10 年繰り返して、その業績をまとめたら立派な生物学誌ができるだろうと予想された。・・・かくして 4 年目の乾燥期の採集を終えて、それぞれ帰国、調査研究にかかっていた矢先、真珠湾攻撃、日米戦争、メキシコ国連国参加等、・・・一切の研究を夢のまた夢にしてしまった」²⁰。

第 2 次世界大戦が終わり、メキシコ国立自治大学が生物学部を新設しようとして、アメリカの諸大学からメキシコの植物にかかわる論文を集めてみると、メキシコでは全く無名の松田による論文が数多くみつかった。チアパス州の原生林に住む松田はメキシコ国立自治大学の教授、終身研究員として迎えられたのである。松田はそれに応え、大学附属植物園を完成させ、メキシコのサボテンの研究に偉大な業績を上げたほか、メキシコの植

物新 6 属を発見、750 種の学会新種の発見、60 万点の植物標本、4 千余りの鳥類及び爬虫類標本を残した。東京大学は、1961 年、松田の論文「南メキシコ植物の生態学研究」を高く評価し松田に理学博士号を授与した。

1978 年 2 月 12 日、ペルーへ植物調査のため訪れた際に他界した。

ここからは私事になるが、幼い時よりメキシコ市に住んでいた著者は「松田先生²¹」のご自宅へ父親に連れられ遊びに行ったことがある。松田先生は立派な方だと伝えられていたが、当時は、サボテンが好きな父の知り合いとしか思っていなかった。チアパス州のエスペランサ農場については全く知らなかった。目の不自由な奥様はレース編みが上手で、幼かった自分もレース編みを覚えたいと思ったものだ。後に知った事であるが、実は奥様も熱帯地域にあるエスペランサ農場で病により失明したようだ。

松田先生が書き残された「南メキシコに遺された日本人の足跡」と題名された手記が父の遺品から出てきた。それがきっかけとなり、不十分ではあるが、この研究につながったのである。

6. アカコヤグア村にて

2017 年 2 月に著者は初めてチアパス州を訪れた。メキシコの首都「メキシコ市 Ciudad de México」に住んでいる者にとって、メキシコの南、グアテマラとの国境地帯にあるチアパス州はとても遠く感じられる。日本人が入植したアカコヤグア Acacoyagua の寒村は、我々が滞在したチアパス州の都市タパチュラ市からは西方 25 キロの

19 上野久、前掲書 p.118

20 松田英二、前掲書 p.22

21 著者の実家では「松田先生」と呼んでいた。

地にある。我々はバスで2時間かかった。ここが榎本植民地の舞台である。村の入り口にある公園には、良く目立つ白いオベリスク形の記念碑がある。正面には「榎本植民記念」、裏側には松田英二の筆による「夏草やつわもの共の夢の跡」の文字が刻まれている。その下には草鹿砥寅二以下の植民団員全員の氏名が刻まれた銅板がある。日本人のメキシコ移住70周年を記念して、チアパス州在住の日本人とメキシコ全土の日本人から集められた寄付金で建立し、1968年の11月30日にアカコヤグア村に「榎本植民地記念碑」が寄贈された。

榎本植民団員が入植して100周年を迎えた1997年5月14日、秋篠宮殿下がアカコヤグアを訪れ、榎本植民記念碑に花束を贈呈され、一分間の黙祷の後、この地の開拓者、そしてそのご子孫達に敬意を示された。チアパス州の人々、主に日本人の血を引く日系人は、このイベントを大変誇りに思っている。これを境にチアパス州日系人の団結が深まったと、Yoshio Nakamura (2012)の論文に記述されている。

ぼんやり記念碑を眺めていると、どこからともなく多くの日系人が現れた。ほとんどが3世である。この村を訪れる日本人は少ないので、我々の訪問が珍しかったのであろう。植民記念碑の横には、3メートルほどの高さの松田英二博士の記念碑がある。この記念碑には次のように刻まれている。

「チアパス州の植物学の先駆者であり、この地に生まれた多くの人々の道徳的、精神的指導者であった松田英二博士を記念し、先生の情熱であり、生きた記念碑である植物の宝庫オバンド山に、公平にして永遠なる敬意を表する」

アカコヤグアに住む日系人は毎日白米を食べ、みそ汁を飲んでいる。美味しいチアパス米をご馳走になった。メキシコ市で食していたカリフォル

ニア米よりも小粒だったが、しっとりした米の触感は、外米とは違い、確かに日本米であった。

7. おわりに

この地に渡って痕跡を遺した多くの日本人のなかで触れなかった方たちがいる。太田蓮司（医者として多くの命を救い、地元の人に愛された日本人）。榎本植民団員ではなかったが、多大な業績を残した小橋・岸本合名会社（商業と農業を両立経営し、日本人により築かれた最初のコーヒー農園を成功に導いたが、第2次世界大戦時に土地を没収された）。さらにその他の多くの日本人の武勇伝がある。

忘れてはならないのは、榎本植民団員としてメキシコに渡った日本人の名は歴史に残り、これからも語り継がれていくだろう。しかし、チアパス州に名を遺した日本人だけではなく、炭鉱、鉄道敷設、サトウキビの収穫作業などの労働に従事し、労働条件の悪さに逃げ出した多くの日本人のなかには、悲劇と挫折に耐え切れず命を絶った者、再び祖国である日本の土を踏むことなく、無念のままこの世を去った名もなき日本人の方が多いということは確かである。

著者が2017年2月にタバチュラを訪れた際に、日系人会館に招待され歓迎された。とても印象に残っているのは、集まった方の一人がそっと私に手紙を手渡してきた。ホテルに戻ってよく読んでみると、自殺した祖父について調べてほしいとの内容であった。沖縄出身であることは分かっているが、彼が命を絶った時、手元にあった書類全てを燃やしてしまったそうだ。彼の名前は Teófilo Gaza (メキシコに移住した多くの日本人はスペイン語での名前を付けていた)。胸が苦しくなったのを覚えている。

次の日、タバチュラ自治大学で講演を行った折

に、200人収容できる講堂が満席になった。前方には明らかに日系人である方たちが大勢座っていた。1時間の講演の後、日系人たちに囲まれ写真を撮り、思い出話などを聞かせてもらった。チアパス州で幅広く活躍している方たちだった。参加していた一人、Martín Yoshio Cruz Nakamuraは、本人が書いた論文を送信してくれた。現在は1冊の本として出版されている。チアパス州に渡った日本人3世が、スペイン語で、自分たちの歴史と日系人としてのアイデンティティを研究し、論文に纏めているのは喜ばしいかぎりである。現在は多くの日系人（メキシコ、ブラジル、ペルー等）がアイデンティティを求めてネットで繋がっている。時代は変わったのである。ディスカバー・ニッケイ（日本人とその子孫）と題するサイトがある。

この研究ノートを書くに至った理由の一つは、このような歴史がメキシコにはあったことを風化させてはいけなさと考えたからである。参考文献に頼るだけの未熟な研究ではあるが、日本人が海外で歩んだ道を多くの方に紹介したいと願う気持ちから生まれた執筆である。

参考文献

- 黒瀧秀久『榎本武揚と明治維新』岩波ジュニア新書 2017年
- 上野久『メキシコ榎本殖民：榎本武揚の理想と現実』中公新書 1994年
- 真継真編『日本・メキシコ交流史話』万年青書房 1993年
- 『メキシコ国チャパス州通称榎本殖民地誌同 70周

- 年記念公園建設報告』1969年
- 松田英二『南メキシコに遺された日本人の足跡』玉川大学出版部 1966年
- 大倉敏之『南メキシコにおける通称「榎本殖民地」視察出張報告』1966年
- 『西日辞典』日墨協働会社編集、東京右文社出版部 1925年
- Camposeco, Víctor Manuel *Correo de Hiroshima, talleres Mujica*. 2013
- Cruz Nakamura, Martín Yoshio *El Japón del Soconusco comunidad e identidad japonesa nikkei en el Soconusco: una mirada desde dentro*. Universidad de Ciencias y Artes de Chiapas, San Cristóbal de las Casas, Chiapas. 2012
- Ueno, Hisashi. *Los samuráis de México: La verdadera historia de los primeros migrantes japoneses a Latinoamérica*, Kyoto Seika University Business Promotions Section. 2010
- Matuda²², Eiji *Las labiadas del Valle Central de México*, del Instituto de Biología. *Sobretiro de los anales del Instituto de Biología*. Tomo XXII, No. 1 México. 1951

22 メキシコでは Matsuda を Matuda と書いてある。